

# The Sinfonietta

# ザ・シンフォニエッタ

## 第25回演奏会



指揮・ピアノ  
若林 誠

25th Concert

2011年10月10日(月・祝)

熊本県立劇場ヨシサートホール

開場17:30 開演18:00

Mozart  
Schumann  
Brahms



主催：ザ・シンフォニエッタ 助成：(財)熊本県立劇場

後援：熊本県 熊本県教育委員会 熊本市 熊本市教育委員会 熊本日日新聞社  
NHK熊本放送局 RKK TKU KKT KAB FM79.1 FMK

公式ホームページ <http://www.the-sinfonietta.org/>

# Profile ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●



## 指揮・ピアノ 若林 頤

*Akira Wakabayashi*

表面的な流行にとらわれず、常に音楽の本質に迫る演奏を信条とする若林頤は、ラフマニノフなどの作品には、ロマンティシズム溢れる劇的な表現力を發揮し、ベートーヴェンやブラームスなどのドイツ音楽では、堅牢な構成と深層を衝くアプローチに定評がある。とりわけ、単なる音の美しさにとどまらない自在な音色表現、圧倒的な技巧は聴衆に強い印象を与えてやまないものであるが、ピアノ演奏芸術における更なる可能性への探究には常に余念がない。

2008年1月、突然襲われた重大な手疾患により、数多くのコンサートやレコーディングをキャンセル。演奏家生命の危機が懸念される事態に見舞われ、時には心身共に困難な状況下で演奏することを余儀なくされたが、治療の成果を得て2010年秋には完治。リスト編曲のベートーヴェン：交響曲 第9番のような超絶技巧を要する作品をも見事に演奏して“完全復活”。2012年にはヨーロッパ演奏旅行が予定されるなど、新たな飛躍が期待されている。

東京芸術大学で田村宏氏に、さらにザルツブルク・モーツアルテウムやベルリン芸術大学でハンス・ライグラフ氏らに学んだ若林は、1982年第51回日本音楽コンクールピアノ部門第2位。1985年、第37回ブゾーニ国際ピアノコンクール第2位入賞。さらに1987年には弱冠22歳でエリーザベト王妃国際コンクール第2位受賞の壮挙を果たし、一躍脚光を浴びた。

その後、NHK交響楽団をはじめとする日本の主要なオーケストラや国内外の著名指揮者たちとの度々の共演や全国各地でのリサイタルなど、多忙な演奏活動を展開してきたが、2002年にニューヨーク・カーネギーホール（ワイル・リサイタル・ホール）で鮮烈なリサイタル・デビューを果たし、カナダ・トロントにおけるMusic Toronto Chamber Music Series やシカゴでのマイラヘス=リサイタル・シリーズにて大成功を収めて再招聘されるほか、フランス・ナントにおける音楽祭『ラ・フォル・ジュルネ』、ストックホルムにおけるアモリナ・リサイタルシリーズなどにも出演。さらにベルリン交響楽団、サンクトペテルブルク交響楽団、ロシア・ナショナル交響楽団、エーテボリ交響楽団、ノールショピング交響楽団、リンブルク交響楽団、パドゥル一管弦楽団、スコットランド室内管弦楽団等とも共演し、英國マンチェスターの「ノーザン・カレッジ・オブ・ミュージック」でマスタークラスを行うなど、活動領域を着実に拡大している。

室内楽奏者としてもコリア・ブラッハー、スティーブン・イッサークス、堤剛、カール・ライスター、フランソワ・ルルー、ラテク・バボラク、ライプツィヒ弦楽四重奏団、ウィーン八重奏団など、内外の名手達と数多く共演して好評を博しており、さらにその延長として、弾き振りによる協奏曲演奏でも注目を集めている。

2007年秋には「ヴィルトゥオーゾ・プログラムによる3連続演奏会」と題したリサイタル・シリーズを東京にて開催、「…若林の音質、とりわけ音の色彩感覚における一層の深化が示されたリサイタルであった。…彼にとってのテクニックとは、作品の内面を汲み取り、それを表現するための手段なのだ。…」などとして、絶賛を博した。

レコーディングはこれまでにデンオノン、ライヴノーツ、オクタヴィアなどのレーベルからリリースしている。

1992年出光音楽賞、1998年モービル音楽賞奨励賞、2004年ホテルオークラ賞受賞。

現在、桐朋学園大学院大学教授、桐朋学園大学特任教授、国立音楽大学招聘教授。

(2011年2月現在)

## 管弦楽 ザ・シンフォニエッタ

*The Sinfonietta*

1986年に結成された小編成のアマチュア・オーケストラ。ハイドン、モーツアルト、ベートーヴェンなどの古典派の曲を中心としながら、ロマン派、近代の曲なども演奏している。アンサンブルを楽しむため、小編成（50人以下）の特性を活かした選曲、演奏活動をしている。

これまでに共演した主な音楽家は、指揮者では本名徹二、山下一史、岩村力、藤崎凡、久保田悠太香の各氏、ソリストでは安永徹（Vn）、堀正文（Vn）、篠崎史紀（Vn）、小野富士（Vla）、O. ボルヴィツキー（Vc）、小林道夫（Cemb）、若林頤（Pf）、合志知子（Pf）、吉田秀晃（Pf）、青柳晋（Pf）などの各氏で、すばらしい指導者・共演者に恵まれ充実した活動をしている。

2006年3月の第20回記念演奏会では、山下一史氏、若林頤氏らと共に演奏。同年9月には「スペシャルオリンピックス・チャリティコンサート」の特別編成オーケストラの一員として、指揮者小林研一郎氏と共に演奏した。また小編成の特性を活かし、御船町、益城町、合志市、宇城市等の小中規模ホールでの演奏も行ってきた。アマチュアでも時間をかけてひとつひとつの曲をじっくり丁寧に仕上げれば充実した演奏ができるという信念をもち、8～10ヶ月の間隔で演奏会を開いている。

ホールでの演奏会以外では、2004年11月にNHK-BSTの番組において熊本城前での演奏が全国に放映された。2008年よりNPO法人オーケストラ創造主催の「マロ塾」に参加し、篠崎史紀氏の指導を受ける様子を一般に公開、またSTREET ART-PLEX KUMAMOTOに参加し、熊本市中心市街地の商店街の中でフルオーケストラで交響曲を披露するなど、一般の方にもオーケストラに親しんでいただけるような活動にも取り組んでいる。



写真提供:HYO

# 曲目解説にかえて～若林さんを囲んでの座談会Ⅲ～

## ■プログラムについて

—— この3曲を選ばれたいきさつを教えてください。

若林さん：モーツアルトの27番というのは、特殊な透明感があつて特にスペシャルなものを感じますので。古典曲から1つは選ぶという理由もありました。

シューマンのコンチェルトは非常に室内樂的です。樂團の人達に能動的に参加していただくことで、すばらしく活性化しえる要素がありますし、前からシューマンはこういう形（弾き振り※1）でやってみたかったということがあります。

Brahms は交響曲的な大がかりな曲なのでシンフォニーの代わりにもなりえるということで決めました。

## ■モーツアルト／ピアノ協奏曲第27番変ロ長調 K.595

—— この曲の特色についてお聞きしたいのですが。

若林さん：全体を通して安らぎがありますね。すごく清らかな感じ、静かな感じ、透明な感じ、そういうような印象を持っています。

—— それはやっぱり最後のピアノコンチェルトということと関係がありますか？

若林さん：それは僕はちょっと分からないですけれども、でもまあ奇しくもそうなんですね。現実的な喜び悲しみというよりかは、追憶的な雰囲気があるんですよ。ちょっとした遠さ、懐かしさというか…そういうようなものが全体を占めてるような気がしますね。

—— モーツアルトは割とシンプルで音の数も多くないと思うんですけど、その裏に書いてあることをどのように読み取るのですか？

若林さん：僕個人的なことですけどね、モーツアルトはそれこそ20代のころははつきり言うと興味がなくて、あんまりよく分からなかつたんですね。まあ単純に言つたら結構つまんないなと思ってたんですよ。

—— （一同笑い）

若林さん：綺麗ですよ、綺麗ですけれど。「立派なものこういう風にかくあるべし」とすごく頑張ってたっていう部分があったわけですが、その呪縛が解かれたところから、急にモーツアルトがストレートに自分の言葉として近づいたような感じがあったんです。一番大事なのは、すごく音を大事にした感覚、慈しみの感覚。本当に感電するぐらいの感覚で音をひとつずつ並べていく。

—— 今日の練習で、出だしを何回かやっているうちに急激に変わっていきましたけれども、それはもう本当に、みんな一音、一音神経を使って…。

若林さん：要するに相互作用っていうのがあるんです。その波長がグルグル回ってくるというのがオーケストラのすばらしいところと思うんです、やっぱり。潜在的に影響しあえるんですね。すばらしいことだと思います。

## ■シューマン／ピアノ協奏曲イ短調 Op.54

—— この曲はとても惹きこまれますよね。何か次々と場面が展開されていく。シューマンのピアノコンチェルトはたった1曲しかないですけれど、そこに凝縮されている魅力を教えてください。

若林さん：ファンタジーというか、情熱というか、苦しみというか、その矢継ぎ早に次々と出てくる展開力がすごい。憧れの念を追い求めて走り切る、そういう内なるエネルギーがすごい曲だと思いますね。

また、非常に即興的な面があって、即興的な感性において取り組んだ時に見えてくるものがたくさんあると個人的には思っています。だからその時その時どういう流れになるか、いろいろ自由があると思いますよね。

—— 3楽章には、拍子の取り方がとても難しい箇所があって、そこはオーケストラもこだわって何度も練習してきました。合わせるのに相当な苦労がありました。

若林さん：拍子のサブリミナル効果でね、隠し絵じゃないけど、結構どっちにでも（2拍子にも3拍子にも）見えるようなところで緊迫感を高めている。

—— シューマンは3拍子の使い方がうまいと思いますね。そして3楽章だけで1,000小節くらいあるのにあつという間に終わる。ファンタジーですね。ところでこの曲を指揮者なしでやるとしたら、プロの方が「無理」と。自分たちはピアノを聴かなくて指揮者だけ見てやつていると。

若林さん：それはもっと複雑にするパターンも多いかと僕は思います。この曲はとても室内樂的ですので。

—— ところで「ド／シ／ラ／ラ」から始まるメロディをドイツ語にすると「C／H／(L)A／(L)A」となって、この曲は愛妻クララへ宛てたラブレターとも言われていますよね。でもブラームスのピアノコンチェルト1番も、そのクララへの想いに揺れる時期に書かれたというから、シューマン、ブラームスと続くってのはなかなか意味深い選曲ですね。(笑)

### ■ ブラームス／ピアノ協奏曲第1番ニ短調 Op.15

—— ブラームスのピアノコンチェルト1番は、あんまり熊本の演奏会では聴いたことがないけど、でも愛好者は多くて“この曲が聴きたい”という方もおられます。もしかして熊本では初演？！

若林さん：かもしれませんね。

—— ところでこの曲は当時、あまりにも交響楽的な作りで、それまでにない形が最初は不評だったとか。※2  
若林さん：最終的にはすごく自信を持った曲だったらしいですよ。それが不評だったんでブラームスはショックだった。

この曲で本当に説得力のある演奏というのは、かなり難しいかもしれません。どっちかっていうとオーケストラの曲を武骨にピアノ用に移したような音の使い方でかなり朴訥ぼくとつとしています。それだけにプレーヤーとしては非常に技が必要な曲で、難しい面がたくさんあると思います。

そしてこの曲は「苦しみ」というものがテーマになっていて、すごく「念」の力が必要だと思いますね。音に対する念力、楽想に対する念力。ニ短調というのは苦しみの調性ですから。

—— そうですね。ニ短調になるまでには65小節もあって、最初から不安定感がずっと続いてます。

若林さん：最初のあの和音っていうのは（ニ短調では）ありえない和音ですから。だからすごい発想の自由ですよ、やっぱり。相当チャレンジ的なことを盛り込んでますよね。いきなりすごい和音から展開されるわけで。構図の大きい壮大な曲ですね。

—— 2楽章は祈りに満ちていますよね。

若林さん：そうですね。隠しきれない感情の起伏があるところが更にすばらしいところです。

—— でも2楽章と3楽章の落差が激しいですね。

若林さん：しかしまあ、モチーフとしては貫徹してますね。つながりがありますね。3楽章はある種の決断力というかね。

—— ブラームスのピアノコンチェルトには1番と2番しかないですが…。

若林さん：1番は“ピアノ付き交響曲”とかよく言われていて、2番の方は（ピアノとオケが）対等的と言われるんですよ、一般論としてね。でも実は2番の方がピアノがオーケストラに包含されます。1番は割と実演（生演奏）でピアノがよく聴こえるコンチェルトでもある。そのところ、割と誤解があるのかなと思いますね。…ということを、演奏の仲間の中では言っているんですが。

### ■ 弹き振りについて

—— 今回で若林さんと3回目になる弾き振りでの演奏会ですが、若林さんは弾き振りをされてからどれくらい経つですか？

若林さん：10年になります。これは指揮者になりたいとか言うことではなく、ピアノ（を演奏すること）に還元するためにやっています。弾き振りをするためにはアイディアや柔軟性が必要だし、経験を積んでいろんな要素を持ったパレットを大きくして、自分を開拓するためです。

—— 私達オーケストラにとっても、若林さんと弾き振りで演奏させていただくことによって、指揮者に頼らない能動的姿勢が求められ、すごく勉強になってると思います。普通、弾き振りでは到底演奏することのないようなブラームスを演奏するんですから！

若林さん：ブラームスのピアノコンチェルトは、試みとしてのチャレンジです。この曲を弾き振りすることで、指揮者がいて演奏する時よりも、緊張感やポジティブなエネルギーがオーケストラとピアノから更に出てくるような演奏をめざしたいです。

2011年9月4日「石松茶屋」にて

※1 ピアニストが指揮も兼ねる演奏スタイル

※2 ブラームスはヨアヒムに宛てて「僕はただわが道を行くだけです」と書き送ったが、悲しげに「それにつけても野次の多さよ！」と付け加えている。「ウィキペディア」より

# Program ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

モーツアルト／ピアノ協奏曲第27番 変ロ長調 K.595

- I Allegro
- II Larghetto
- III Allegro

シューマン／ピアノ協奏曲 イ短調 Op.54

- I Allegro affettuoso
- II 間奏曲：Andantino grazioso
- III フィナーレ：Allegro vivace

～ 休 憩 ～

ブラームス／ピアノ協奏曲第1番 ニ短調 Op.15

- I Maestoso
- II Adagio
- III Rondo: Allegro non troppo

指揮・ピアノ：若林 顕

## ごあいさつ ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

本日は、三連休最終日の忙しい中に御来場いただき、誠にありがとうございます。

ザ・シンフォニエッタの演奏会も25回目を迎えました。創立にかかわった中心メンバーが五十路にさしかかる中、若いメンバーも多く加わり、世代をこえた活気ある練習を行っておりまます。

さて、今回の演奏会では、偉大な作曲家による名ピアノ協奏曲を3曲、しかも若林顕氏による弾き振りでという、一見無謀なプログラムに挑戦しました。ブラームスの協奏曲は特に長い時間を要するため、月2回だけの練習で、練習の配分をどうするかや、ただでさえ難しいシューマンの3楽章を指揮なしでどう合わせるかなど、様々な困難がありました。しかし、素晴らしい曲の魅力に支えられながら練習を楽しみ、勉強できたことが、何より大きな収穫でした。また、今回で4回目の共演となる若林顕氏のピアノの素晴らしさに、感激で涙ぐみながら練習に取り組んだこともあります。本日こうしてともに同じ舞台で演奏できることは、この上ない喜びです。

メンバーのほとんどが素人ではあります、練習の中で積み上げてきた思いを一つに、ザ・シンフォニエッタらしい演奏ができればと思っております。

長時間の演奏になりますが、アマチュアオーケストラの意気込みとともに、名曲を最後まで味わっていただければ幸いです。

本日は、誠にありがとうございました。

ザ・シンフォニエッタ 代表 緒方 宏明

# Members ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

ゲスト・コンサートマスター	ヴィオラ	フルート	ホルン
緒方愛子※	和泉希代子	泉由貴子	伊藤友美
	上田弘幸	緒方宏明	小西美津子
第1ヴァイオリン	木村宣子※	和田隆宏	萩坂和彦※
井芹健慎	毎床一寿		吉田佳史
打越公美※	丸田潤	オーボエ	
浦中由紀		オーボエ	トランペット
岡本侑子	チェロ	平尾 豊	今村隆志※
河口沙也加	内田祐輔	松本聰子	福島敏和
田中唱	金子岳史		
西村勇也	坂本一生	クラリネット	ティンパニー
第2ヴァイオリン	渋谷 統	岡村クミ	永野哲※
伊藤大輔	瀬畠むつみ	府高明子	
尾上香織※	馬原ひろみ		
實政稀子	コントラバス	ファゴット	
島森恵三※	岡田尚子	上田 宏	
瀬畠健雄	竹内尚志	酒井文代	
原口英里奈	歳田和彦		
	中川裕司※		

※は賛助出演(敬称略)

# お知らせとお願い ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

## ♪ 第26回演奏会のお知らせ

日 時：2012年9月2日(日)  
場 所：熊本県立劇場コンサートホール  
指 握：山下一史  
曲 目：ビゼー／歌劇「カルメン」全曲(演奏会形式)

## ♪ 団員募集のお知らせ

ザ・シンフォニエッタでは、現在団員を募集しております。  
詳細は下記にお問い合わせください。

ザ・シンフォニエッタ代表：緒方 宏明  
携帯 090-7454-6581  
メール ogahiro@bronze.ocn.ne.jp  
ホームページ <http://www.the-sinfonietta.org/>

## ♪ 主催者からのお願い

- ホール内での喫煙、飲食はかたく禁じられております。
- 携帯電話等の電源、時計のアラームはお切りください。
- 小学生未満の方のご入場はご遠慮ください。  
また、お子様がお静かにできない場合は、「親子室」をご利用ください。
- 演奏が始まりましたら、ホールの移動、座席の移動をお控えください。

本日は、ザ・シンフォニエッタ第25回演奏会にご来場いただきまして、誠にありがとうございました。